

口上の全文は記憶して居れぬが、永年相反目してゐたが自分も五代目春太夫の門人であつて大椽とは兄弟父子である、今大椽は師匠の名前を襲いで既に六代目となつてゐる、越路から春太夫となつた時には既に自身は名前に對して彼れを師匠としなければならぬのである、今其師匠は攝津大椽と改名するので自分の此座は來たのであるから、何うぞ今後は自分も師匠同様に御最負御引立を願うといふのであつた、これに依つて見れば大椽は日本の義太夫語中で第一である事は少しも異議のない話であるのだ、と同時にこれ位傑出した藝人はすべての藝界を引括めて他にもないといふ事を斷言して憚らぬのである。

附 録

藝 界 珍 談 奇 聞

藝珍談奇聞

▲「あなご」と「をなご」

長唄三絃の者宿、杵屋勘兵衛(眞に十二代目杵屋六左衛門といつた人で、今の十三)が恰ど廿歳の折、豫て藝道に熱心な處から、或時淺草の觀世音へ參詣して、私二十五歳までは、一切婦人の肌へ觸れませぬ程に、あはれ願くは、藝道を上達せしめ給へと赤心こめて誓を立てたまでは宜かつたが、其所が夫れ凡夫の淺間しさで、四五日も経つた後、ケロリ右の誓を忘れて了ひ、麴町の質屋の主人で、伊勢屋徳兵衛といふ最負の旦那に連れられ、ブラ／＼来たのが、吉原で有名の去る大離、同じく遊びにても、普通にやつたのでは妙でない、種々考案を廻らした揚句が、彼を若旦那に

標商録登



印

植草式サイダ抜付七徳用ナイフ

特許局登録

何レモ「サク」入 郵券一割増 送料拾錢

別用効

テニ本一
徳五

(525)

ナ 錐 鑑 コ サ
イ (キ) ロ ヲ イ
フ (キ) ツ ヲ グ
切 (リ) 切 抜 抜

圓 壹 金 同
(909)

形ルトスヒ
用 徳 五

錢拾五圓壹
徳 七

(888)

ナ ホ 籠 爪 錐 コ サ
イ コ (キ) ロ ヲ イ
フ ク 氣 (リ) 切 抜 抜

錢拾五圓壹

東京市兩國
千代田十四



印

ナイフ製造所

して、質屋の大將が取巻といふ體にした。何事も知らぬが佛にあらぬ菩薩の君は素より男前は好し、其れに大家の若旦那と思つてゐるから、下へも措かぬ愛相よりの面白さに、遂ひ我を忘れた彼は、嬉しき首尾に一夜現心を抜かした翌朝、不圖寢床の中で思出したは、觀世音へ女を断つた一條。コリヤ飛んだ失態をやらかしたと、今更荐りに悔んで見たが、時既に遅し、最早後の祭禮の御利益も無さうに思つたので、其れでは寧ろ神様へ謝罪をした上、改めて女に類似つた物と断ち更へたら宜からうと、随分勝手な神信心も有ればあるもの、翫ぶが如くに自宅へ歸つて、早速身體を洗ひ淨め、再び觀世音へ參詣して、型の如くにお詫を済した後。をなご(女)とあなご(魚)とは訓が似寄つてゐるからと、とう／＼あなごに断更へて了つた。スル下觀世音の立腹は觀面に現はれ、歸途で生命から二番にしてゐた三味線の撥を、

如何した拍子か、取落してニツに折つて了つた、多分觀世音の胸中では、撥は罰同訓であるからとでも、思つたか奈何だかは判らぬ。

▲手の舞ひ足の踏み所を知らず

講談師の巨井一が神田の白梅亭(先代)で晝席の眞を打た時、素より彼が尙ほ若年の折りの事で、彼は得意の「義士銘々傳」の一節、例の淺野内匠頭が、一朝の忿怒に乗じ、松の間に於て吉良上野へ切りつけた騒動が、城外で供待をしてゐた諸藩の家臣の耳へ入つたので、未だ下手人の判然しない矢前、各自己が主人の身の上を懸念つてゐると、旋て御目附鈴木傳左衛門から、切つた人は淺野内匠、斬られた人は吉良上野といふ事を知したので、皆々吻ト安堵の思をなしたに引更へ、淺野の家臣速

水藤右衛門に菅野三平の兩名は、餘りの事に吃驚したが、其所へ來ると彼は一段聲を揚げて「兩人の験き宛ながら手の舞ひ足の踏み所を知らず」とやつた。スルト寄席が終つた後で、一人の人品賤しからぬ老人が樂屋へ來て、自分は講釋が好きで、毎日牛込から聴きに來る者だが、洵に餘計な口を利くやうで濟まぬけれど、先刻お前さんの話中で「手の舞ひ足の踏み所を知らず」といふ言辭があつたが、あれは全體驚いた時に言ふべきことでは無く、歡喜に堪へぬ様を形容した文句であるから、今後は其の積りで演んなさいと。言はれた時には、流石の彼も赤面した儘、少時は顔を挙げ得なかつたさうだ、此の老人は何人あらう、故の文部大臣外山正一博士の祖父君であつた。

▲鼻頭の大提灯

明治五年の三月三日、節句の祝か何かで、三代目芳村孝次郎、二代目小作（後に瓢二）吉住小太郎（後に四代目小三郎）杵屋勝三郎（後に勝作）の四人が、有馬邸へ招かれた折りの事、右の孝次郎は聲は頗る美しい代りに、一本調子の、二も三も唄へなかつた人であるが、其日も「月の巻」を唄つたところ、中で「お、扱て左様なら明後日か、はあて」へ來ると、其の「はあて」を少しく揚げれば宜い奴を、彼は亦た馬鹿に調子外の高聲で、はて——とやつたから、恰どワキを弾いてゐた勝三郎が思はずフツト失笑した拍子に、是れは亦た如何な事、平素腦の悪い爲め、鼻の縮りが宜くなかつた人であるから、ブク／＼と鼻の頭へ大提灯を吹出した騒ぎに其の座

に居合した一同、まるで轉倒るやうな大笑。

▲投身の狂言

浪花節の人氣者、浪花亭峰吉が高座へ上つてから三年目さる悪友に誘はれたが病附となつて、果ては人の異見もソツチ退けの悪所通ひに、殖るものは不義理な借金減るものは社會の信用といふ鹽梅で、後には彌上首も廻らぬ始末となつたので、先生頗ぶる煩悶の體であつたが、いくら考へても別に巧い智恵も出ず、是れではならぬと、或時一日胸を痛めた揚句が、仕様事なしの投身の狂言、見事當るか外れるかは時の運に任して、兎も角も一幕出して見やうと決心したから、或宵何處から持つて来たか、全で雜巾屋の招牌宜しくと云ふ襦袢を一枚引掛けた儘、新大橋の真中へ

來たり、頓て欄干へ片足を掛けて、南無阿彌陀佛と唱へながら、密と振り返つて見たが、生憎人ツ子一人通らない、斯くて橋上に佇立むこと約一時間、漸次に身に泌む夜風と共に、腹は段々空つて來る辛さ。今は情々愛世の味氣無さを感じて、エ、寧そ一と思ひに飛込んでと狂言が餘り寫實になり過ぎて、危く瓢箪から駒が出やうとしたところ、ツイ娑婆ツ氣を出して、詰らぬから歸へらう。

▲不具の悲しさ

明治廿五年の八月、故人市川新藏、同市川壽美藏、今の市川女寅の連中が山梨縣甲府の櫻座へ乗込んだ時の噂。狂言は慥か「本朝二十四孝」新藏の八重垣姫、壽美藏の山本勘助、女寅のぬれ衣といふ役割であつたが、扱ていよく初日となつた

處、新藏が例の片眼であるのを見て、何にも知らぬ太夫元等が不審を抱き、苟くも新藏ともあるべき優が、片眼の筈はない、是れは吾々を田舎漢と蔑視つて宜い加減の賈物を引張つて来たのに相違ない、サア真正の新藏を連れて来て貰はうと、いくら皆なが言つて聴かしても解らぬ、金主は素より、果ては見物までが承知しなくなつたので、竟に金主の番頭が、實否を確める爲め、態々築地の團十郎宅へ行つたところ、同家で本人の寫眞を出して見せたので、辛と納得して歸つたとは、隨分人を莫迦にした話である。

▲泥棒と誤まらる

落語界一方の大關、殊に滑稽の妙に於て、當今隨一の評ある柳家小さんが、十六

七の時分、餘り道樂に身を持崩した結果、両親も愛相を竭かし表面は久離切での勘當といふことにして、實は平常懸念な本所横網の或る袋物屋へ預けられたが、偶々其の隣家の歌澤の師匠で、晝となく、夜となく、唄の聲や三味の音締が聴えるから根が好きの彼は、如何かして一晚聴きに行きたいものだ、日頃荐りに思つてゐたところ、恰好或る晩の事、隣家はお浚ひか何かあると見え、平常よりは大勢の唄ひ聲、三味の音色も殊更面白く響くので、最初の中は静と聴いてゐたが、もう箭も楯も堪らなくなつたから、萬一の時の用意にと、幾程かの祝儀を懐中へ拗込んで、密と二階の窓から拔出し、四ツん這ひになつて、辛と隣家の二階へ忍込んで見ると、生憎其所へ寝てゐた一人の婆さんが目を醒して、彼を見るや否や、皺腹聲を張り揚げて泥棒々と怒鳴つたので、之を聴きつけた下の逆中は、其れツと斗り、手に々

々獲物を提げた儘、二階を目蒐けて駆上つて来る騒ぎ、事の意外に面喰つた彼は、逃げるにも逃げられず、唯だマゴクしてゐたが、頓て實はコレ／＼の譯でと、備に事の次第を話したので、一同は腹を抱へて大笑、其れならば下へお出でなさいと其の晩彼は好きな歌を唄はして貰つた。

▲命がけの講釋

猫遊軒伯知、或る時下谷坂本の寄席で、俠客新藏兄弟の經歷を演んだが、是は演題が所に關係してゐるから無論客受が好からうと思つたので本人大得意で饒舌つてゐたところ。或る晩の事、右の兄弟の喧嘩に掛合つた久太といふ男が、突然に話の筋が相違つてゐると怒鳴り出し、彼の講釋師を叩ツ殺してると、棄白を殘して

歸つたので席亭の主人は吃驚して、右の次第を伯知へ話すと、伯知の心配は一通りで無く、眞ッ青になつて頭へてゐたが、兎に角斯うしては居られない、俺は是れから謝罪に行くから、お前さんも萬望同道して下さいと、嫌がる席亭の主人を無理に連れて、先方へ詫びに行つたといふ話。

▲お早う御座います

俳優が樂屋入りをする時には、隣り近所の運葉娘や、浮氣な妻君連はいふに及ばずさては其處らの子守り女までが、器々いつて見慌れてゐるので、俳優の方でも、強がら其様な者に外飾をする譯ではあるまいが、職業柄、自然粗末な服装では極りが悪いと見え無理算斷をしても、着飾つて行くやうになる。處で故人の團十郎も後

年には多少有福になつたが、まだ明治九年の十一月、芝の新堀座から新富座へ移つた時分には、甚く困窮の有様であつたから、外所行にも不慮着にも唯ツた一枚の古ぼけた紋付羽織で済してゐたので、成るだけ人の目に着かぬやうにと、人並よりはズツト早く、未だ十分夜が明切れぬ頃に樂屋へ來るのであつたが、或る朝のこと、望月長左久(今の七代目太左衛門)が例の如く一番太鼓を入れて、今しも樂屋の方へ行かうとする時、何だか樂屋口の所で物の蠢めくやうに見える。ハテ變だなと思つたものゝ、何しろ朝の四時といふのであるから、劇場の内部は薄闇くつて、逆も何かが何んだか判るものでない、彼は氣味の悪いこと夥しいのであるが、併し此の儘に抛擲つても措かれないから、恐怖々々ながら少しく近寄つて見ると確かに男だ、何人だか判らぬが、一人突ツ立つてゐる男がある、倅としたが、更に渾身の勇を鼓し

て進寄り、首差延べて凝と覗くやうにして見ると、是れは仕たり、例の團十郎であつたので、思はず呀ツと叫んだが、極り悪げに、オお早う御座います。

▲雪隠で玉子

是は少々穢い話で恐入るが、弘化の頃、小鼓の妙手で、大西徳兵衛といふ人物がゐた。然るに此人にして此病ありで、家には可なりの財産があるにも拘はらず、什麼もチト狡猾い性質で、其の爲め時々飛んだ失態を演ずる事がある、或る時、二三人の仲間と細川邸へ招かれて、各自得意の腕を振ふのであつたが一同の藝人が座敷へ並ぶと、頓て鶏卵を山盛りにした器が出る、其奴をデロリ眺めた徳兵衛、早くも例の氣が勃々と起つて、少時は右盼左顧してゐたが、側で氣の附かぬ隙を窺ひ、手

早く五六個を袖の内へチヨロマカして、何喰はぬ顔をしてゐたまでは宜かつたが、扱ていよく演藝開始となり、彼も持参の鼓を取りあげて、掛聲面白く叩いてゐると、袖の劇しく動くにつれ、中に潜んでゐた鶏卵は、各自衝突をやらかした爲め、折角の捕獲物も悉皆グシャ／＼に潰れて了つた、併し本人は一向に氣がつかず、興に乗じて矢鱈にボシ／＼やつてゐる内、催て小便を催ふして来たから、一寸中座をした後が大騒ぎ、其處等四邊に何んだか妙な物が流れてゐる、恰と居合はした武士連中も不審に思ひ、是れは何んだらう、全體何人が這麼悪戯をしたのかしらと、折角の演藝會も何處へやら、唯だもう喧々いつて噪いでゐたが、其の内一人が、時に徳兵衛は何處へ行つたらう、妻が見え無いやうだと言はれて、始めて氣の附いた一座の面々、爾うだ、何んでも先刻便所へ行つた様子だが、其れにしては些と

長過ぎる、是れや事に因ると徳兵衛の所爲かも知れぬ、兎も角も一應便所を驗べて見やうと、中で好奇心の男が、密と便所の内を覗いて見ると、先生そんな事は夢にも知らず、今や毀れた卵の殻を摘みながら、袂を餘念なく舐廻してゐる眞ッ最中。

▲左様で御座ります

今の三遊亭圓左が、米朝といつた時分、餘り道樂に耽つた結果、東京にゐることが能ず、詮術がないから、弟々子の松朝と一緒に、一日花の都を後に眺めて、迥々中仙道くんたりへ遁んだが、途中武州の岩槻へ来ると、松朝は不圖した譯から、さる丸有の寡婦に戀着かれた爲め、竟に其の家へ入込んで了ひ、一人取り残された彼は、心寂しくも辿り来たつたのが、上州の前橋、姑らく其地へ返つてゐた處、一日

闖らす橋藏といふ知人に邂逅つたから、地獄で佛の威をした彼は、訊かれる儘に、甚く難澁してゐる事情を明かすと、其れでは恰ど幸ひな事がある、私も實は落語家を癢めて、今では旅稼ぎの俳優、澤村訥久之助となつてゐるが、今私の入つてゐる座が、人が足りなくなつて弱つてゐる矢先き、如何だらう、一番俳優になつて見る氣はあるまいかと、親切面に現はしての勸告に、彼は固より困つゝある折りであるから、別に異存のあらう筈はなく、寧ろ喜んで承知を爲たので、橋藏は直と彼を座頭の村右衛門といふ者へ引合はせ、茲にいよく俳優となつたが、名前に就て彼は種々勘へた揚句、彼の親父が先代の團升と懇意な處から、團升の俳優の扇遊の扇と、自分の名の米朝の米とを結合して、市川扇米といふ、随分變つた名前を付けたのである、スルト四五日過つて、何の狂言であつたか、彼に申上げますの役が付いたの

で、一日例の通りバタ／＼で花道を出で、七三で止つて兩の手を突き、申上げます、とやつたのは宜かつたが、村右衛門の某が、慌しい何事ぢやと尋ねると、彼は自分の臺詞を忘れて了ひ、ハツと思つて、無闇に焦心つて見たが、如何しても思出せぬ、スルト村右衛門は流石に氣を利かして、ウム、管領職の御乗物が、早や大手前へ見えたと申すのかと、程好くハツを合はせたので、彼は仕方無しに、左様で御座ります。

▲知事様のお泊り

甲府の櫻座（明治廿五年八月興行）から歸京の時、平素法華宗の信者であつた先代善美藏は、どうせ此土地へ來た序だからと、遽かに身延山の參詣を思ひたち、

三四名の門弟を連れて、出掛ける途中黒岩の宿で日が昏れた爲め、山城屋といふ土地の旅籠屋へ一泊する事となつた。元と此の壽美藏といふ優が、不思議にも當時山梨縣の知事であつた藤村紫郎氏（今の貴族院議員）に似てゐたので、山城屋の番頭も尙しやと思つたから、門弟の三壽藏（今の壽朝）を招んで訊くと、三壽藏は失笑したさを堪へて、如何にも爾うだと答へたので、サア山城屋では大騒ぎ、直と一行の室を變更へ、頓て主人が羽織袴で挨拶に来る、打つて變つた款待ぶりに、今は他まで知事で押通さねばならぬ、其れで壽美藏は自分の事を親方なぞと云つちや可ないと口止をした、斯くて首尾よく藤村知事になり濟してゐたが、其の爲めに抄ながらぬ散財を蒙つた、旋て夜が明けると、一行は倉皇々々に此の家を飛出し、凡そ道の半丁も來たと思ふ頃、一同は言合したやうに、ハツハ……アツハツハ……

ウツハツハ……

▲唯ツた三人

浪花節の東家三叟が、まだ東京へ出て間もない頃の嘶、當時彼が宿泊してゐた家は、駒込の青物市場の近くで、今日では既に失去つてゐるが、往年は却々流行つてゐた喜笑亭といふ寄席であつた、其れで彼は毎晩此の寄席から、廻橋の是れも失つた大黒亭へ通ふのであつたが、或る土砂ぶりの晩の事、例の如く右の大黒亭へ出掛ける途中、跌いた拍子に肝腎の下駄の鼻緒を踐切つて了ひ、跣足のまんま飛びつけて見ると、寄席には未だ三味線弾きが來てゐないといふ始末。詮術がないから、近所で翫具の三味線を借り出し、是れで前講の弾き語りをやつてゐたが、今にも來るか

と俟つてゐた後連が、當夜に限つて、意地悪く一人も来ない爲め、彼一人で殆んど三時間の續け演り、もう流石の彼も疲勞れて了ひ、今にも手から三味線を落しさうになつたので、一先づ口演を歇めて了ひ、扱て聴衆へ向つて云ふやうには、今晚は寔に相濟まぬ譯ですが、御覽の通り後連が一人も参りませんので迎も此の先き私獨りでは演り切れませんか、何卒丸札を持つてお歸りを願ひませう、處が聴衆は承知しない、三絃は抜きでも宜いから、是非お前に演つて貰ひたい、とノツピキならぬ註文を、愛嬌家業の悲しさには強ひて嫌やとも断り兼ね、其れでは演つて見ませうと、語り出すには語り出したものゝ、既に先程から十分に疲れ切つた揚句であるから、聲も思ふやうに立たなければ、節廻しも可笑しな調子となり、随つて譚の筋も支離滅裂になつたので、其所此處にクスリ／＼笑ふ聲が聴へる、彼は餘りの面

目なさに眼を閉つた儘で、額上に球の汗を沸しながら、而して腋の下に冷汗を流しつゝ、無我夢中で一生懸命に唸つてゐたが、頓て如何にも静肅したやうであるからヒヨイと眼を開けて見ると、聴衆は何時の間にか通んで了ひ、唯ツた三人、坐睡をしながら残つてゐた。

▲飛沫

年は何時であつたか失念だが、何でも故人團十郎が初めて「春日局」を歌舞伎座で演つた折、例の松原の場で徳川家康が駕籠で通りかゝると、兼て待受けてゐた春日局が、順禮の姿で直訴をするといふ幕だが、右の家康が出て来る所で、「後の立場に馬曳き止め」の馬子唄がある、スルト其の頃同座の立三味線であつた故人の

杵屋長四郎が或る日他方から御馳走を貰つたので、鳥渡下座へ出る譯にゆかないから、何人か俺の代りに一幕だけ勤めて貰いたいの頼みを、心善く承諾けたのが、今の五代目杵屋勘五郎であつた、勘五郎は腹の中で、何有俺にだつて弾れない事があるものかと、多寡を括つて長四郎の代理を勤めてゐたが、恰ど春日局が肝腎の臺詞を言つてゐる最中、固より未だ家康の駕籠も見えないのに、如何して間違へたものか、彼は早くも例の馬子唄を引出したから、團十郎は驚いて、舞臺から低聲で存りにシツ／＼と止めてゐる、始めて氣がついた彼は、併し愁じ今になつて歇めては如何にも自分の失態を観客に見せるやうなものだからと、大胆にも懸念すドン／＼續けてゐると、堪らなくなつたから、團十郎の門弟が四五人駈出して来て、是れさ如何したもんだねと云はれた時には、餘りの耻しさに最う赫ツと逆上せて了ひ、何

が何やら薩張り辨別らなくなつてゐた、其の折り、彼の飛沫を喰つて、飛んだ迷惑をしたのは、實兄の六左衛門と杵屋六四郎との二人で、斯うなると観客が無闇に嗤子方の方へ目を注ぐ、二人は極りの悪いこと夥しく、有らば穴へでも潜りたいくらい、と云つて今更遁出す譯にもゆかないから、下座の窓から観客に顔を見られぬやう、中腰になつて弾いてゐた、幕になると、勘五郎は團十郎から大譴責を夥多。

▲旅の耻はかきさずて

今の六代目一龍齋貞山が、まだ昇龍齋貞丈といつた頃。不圖とした事故から、房州廻屋をして見やうといふ考へで、或る日靈岸島から房州通ひの小湊船へ乗込んだが、實は前以て旅費の準備をして措いた譯でも無いから、八十錢の船賃を拂つた

らば、餘すところ幾かに二十錢の囊中。併し懸念うもんか、奈何にか成るだらうと思つてゐる内に、汽船は熾んに黒煙を吐出しつゝ、今や布良の沖合へ差蒐かると、如何いふ加減であつたか、突然汽關に故障を生じた爲め、已むなく汽船の進行を止める事にした。といふよりは寧ろ停つて了つたのだ。サア大變。斯ふなると何時進行を始めるのか、一寸心算が無いといつた理窟で心細いこと夥しい、況んや囊中幾何も無き彼に於てをやだ、仍で彼は同意者八人と共に、一隻の短艇を驅つて、最寄の陸へ上つたところ、一人前四錢宛の短艇賃を取られたので、いよ／＼十六錢の財産となつた、彼は其れでも構はず、脚に任せ、ドン／＼やつて來たのが、北條の或る寄席。固より彼は其所で一興行する心算でゐると、偶ま病人があるといふので其れも無効。仕方がないから、其の足で館山へ行つて、平素知己の寄席へ相談を持

蒐けると、運の悪い時には這麼もので、恰ど其の折り其所の主人が芝居興行をやつてゐた爲め、碍々挨拶もせず断つて了つた。彼の失望は如何ばかり、此時囊中には既に一錢も餘さず、腹が空つたからといふて、物を買ふ譯にもゆかぬ。といつて一無錢飲食を試みる程、生憎性根は腐つてゐないから、仕方泣く／＼空腹を抱へたまゝ、更に此處から四五里程隔たつてゐる千倉の建具屋(寄席だが、持主が建具屋の主)へ辿りつくると、何の事だ、此處も折悪しく浪花節が懸つていたから、彼は幾んど途方に暮れて、歎息を吐きながら銷氣かへつてゐると、頓て春日井秀吉といふ右の浪花節語りが、事の次等を逐一聽いて、其れぢや今夜此處へお泊んなすつて、私に講釋を少々教へて下さい、浪花節の材料にするんですから、と言出したので、渡るに船と悦んだ彼は、其の夜此處へ一泊する事にした。スルト翌朝、早くも彼の噂が界隈へ

傳につた爲め、博徒の親分小林某の宅へ聘れ、「大石内藏之助の生立」と「倉橋傳助」とを二席づゝ演んで、貰つた金が二圓五十錢。こりや有難いと思つてゐる矢先、今度が天ぶら屋の主人に招かれ、此處に一圓と九十五錢あるから、何卒是れだけ演つて貰いたいと云ふ註文。一圓九十五錢とは可笑しな計算と思つたが、是れも啗の種になる事だからと、何か面白い講釋を一二席やつた、斯くして今は多少の旅費も出來たから、一先づ此處を出立して、天津へ向つたが、別に香ばしい事も無かつた爲め、直と小港へ廻り、日蓮上人の生れたといふ例の誕生寺へ參詣して、興津へ出で、更に勝浦の大漁亭といふ寄席へ尋ねて行つた、處が丁度明後日から人形芝居を打つ約定であるから、茲精々三日間位ならやつても宜い。といふ席亭の主人の話で、茲にいよいよ三日間やる事に決め、先づ諸所へ貼紙をして、人氣を集んだのは宜い

が、此の土地の習慣として、何の興行をするにも、前日に大鼓を叩いて觸れて廻はる、併し其れを爲るには、尠なからぬ費用が要るから、席亭の主人は彼に注意して先生一ツ自身で廻つたら如何です。と云ふ奴を、無碍に斷る譯にもゆかす。儘上旅の耻は掻き棄てたと、勸められる儘に、彼は其の日太鼓を叩いて廻つたところ、可笑しい事には、其の晚いよ／＼彼が高座へ現はれると、ヤア講釋師は二人ゐるのだ、彼は晝間太鼓を叩いて廻つた男だから、多分門人だらう。と客は各自に噂をしてゐる、彼は可笑しくもあり、又莫迦々々しくも思つたが、兎に角「藤堂日記」一席と「義士銘々傳」一席とを演んだ。處が案外に好評を博して、二日目の晩には、六十三人からの客がある、此の鹽梅ならばと、内心密かに忻んでゐると、例の人形芝居の一座が乗込んだ爲め、餘儀なく二日限りで歌める事にした。スルト席亭の主人が彼

を隣りの料理屋―寧ろ達摩茶屋―へ招んで、何卒是れにお懲りなく、又其の内に來て下さいまし。といつて、種々酒肴などを並列てる。元來此の料理屋は、席亭の經營にかゝるものであるから、無論これは席亭の馳走であらうと思つて、饅腹喰食をした揚句、ドレ行かうと立掛かる刹那、へいお客様と差出したものは、筆太に記した一圓三十錢の勘定書。

▲ヒヨットコ踊りの悪落

確か八九年ばかり以前と思ふ、大阪の浪花座(焼失後)で演藝會を催ふした折、東京から招ばれた連中は、故人常磐津林中、杵屋六左衛門、若柳壽童、其れに壽童の門人吉藏、吉次郎などで、就中吉藏と吉次郎とは、例の勢獅子の早替りに、一番

ヒヨットコの面を被つて、悪戯けに戯ける趣向であつたから、二人は豫じめ相談して、獅子を踊つて了つたらば、直と其の儘、腹掛に股引でやらうと、チャンと手筈を極めたまでは宜かつたが、扱て最初の勢獅子は難なく終り、いよく早替りのヒヨットコ踊りに、二人は面を被つて飛出したところ、吉藏が不圖吉次郎へ目を注げると、大阪仕立の股引であるから、前部が程好く合はない爲め、如何はしい揮が露出てゐる、何といふ事だらうと、可笑しさを怵へながら踊つてゐたが、旋て胯間の工合が妙であるから、ハテナと思つて、ヒヨイと下部を覗くと、イヤマヤ、自分も同じく猿股が面を出してゐたので。氣耻しくつて、逆も踊つてゐられない。宜い加減に胡麻化して樂屋へ遁むと、師匠の壽童に大吐を喰はされた。

▲鮫屋の取りちがへ

明治二十一年、猫遊軒伯知が、初めて大阪へ興行に行つた折、老松町の雀館といふ鮫屋の二階を借りてゐたが、一夜中座へ芝居見物にいつて、歸途に西洋料理店へ寄つたが、頓て其處を出た時分は、既に十二時近になつてゐた。其内に雨が降つて来たので、濡れては大變と、彼は急歩で歩き出したが、雀館へ来た積りで一軒の家へ飛込むと、入らつしやいと言ふ挨拶であるから、ハテナと思つて能くを囁ると、鮫屋は鮫屋だが、自分の泊つてゐる雀館ではなかつたので、此奴は失策つたと思つたけれど、今更無言つて出る譯にもゆかず、別に欲もない鮫を誂へて、ホンの申譯に一ツ食つた儘、表へ出たものゝ、何しろ初めての土地だし、且又夜も遅くなつてゐる事であるから、何方へ行つて宜いか、薩張分らなくなつて了ひ、唯だ呆然として歩いてゐると、幸はひ前方から巡查が来たので、幸と教へて貰つて歸宅する事ができた。

▲行く先も又行く先も

桐生の豪商木綿問屋の主人で、坂巻某といふ好色漢が一昨年三月頃例の如く商業上の用向を帯びて、姑ばらく東京に足を返めてゐた間、固より束の間も白粉の薫を忘れさらぬ男、有るが儘に紙幣片を飛して、其れから其れへと青樓遊びに現心を抜かし、自分では天晴れ紀文と丹次郎とをチャンボンにした積りか何かで、獨りよがりの有頂天を極め込んでゐたが、或る時の事、取巻に櫻川三孝、堀羽家徳二

の二人を引卒して、富士見町の待合常磐木の奥座敷に籠城り、三日ぶん流しの底抜け騒ぎを演じた揚句。もう此家も歴いたから、チト河岸を更へて、澁谷へでも突貫しやうぢやないか、といふ鶴の一聲に、争でか二人は躊躇ふべき、オット皆なまで被仰る勿れサ、エヘン、斯う見えても澁谷通の私們、萬事の寸法はチャンと此の胸の中へ壘んで御座います、喃漢と口から出放題に饒舌つたものゝ、實は二人とも一二度しか行つた事のない澁谷、随分危ツかしい案内ではあるが、何有甚歴にか成るだらうと、纒か許りの記憶を便りに、やうやく神仙館(温泉宿)へ神輿を据へ、直様三人の藝妓を招んで、一仕切り陽気に騒いだ後、右の藝妓進に對して、例の神秘不可思議の談判を持込むと、私達は懸念いせんが、一應此家の主人へ掛合つて下さいと云ふから、女中を招んで聽いて貰うと、お客様方のお泊りなさるのは宜しう

御座いますが、藝妓衆を宿める譯には参り兼ねますとの復命。何といふ不粹な爺だらうとは思つたけれど、強ひてと言ふ事も出来ず、桐生の大盡頭ぶる落膽の様子であるのを見て取つた二人は、旦那宜しう御座います、ツイ此の先きに仙臺家と申す極上飛切りの家がありますから、直と是れからお伴を致しませう、とは言つたが、實は是れも名前だけ聞き囁つて措いた家、唯だ道玄坂の下と斗り覺えて、別に行つた事のあるといふ譯ではないから、心細い事夥しいけれど、兎に角三人の藝妓を先さへ立たして、後からテク／＼聞き覺えの道を辿つて行くと、只ある立派な門の傍に、仙臺家と記した瓦斯燈が立つてゐるから、締めた斗り、旦那此處でございと言つたなり駐込んだ二人は、案内も請はず突然玄關を飛上つて見ると、傍に一人の書生體の男が机に靠れてゐる。ハテナと思つたから、藝妓が三人参つては居りま

せんかと訊くと、書生は性訝な顔色をしながら、イヤ左様いふ人物は来ないと云ふ些か面喰つた二人は、其れでは此方は何人様の御屋敷で、書生は笑ひながら、醫師です。ハツと思つたが早速の氣轉。イヤ是れは飛んだ失禮を、實はお隣家と間違へましたので、書生は尙ほも笑ひながら、ハ、アお隣家と、併しお隣家は農科大學の教師ですよ。イヤハヤ重々の失策に居た溜らなくなつて、倉皇々々玄關に飛出して見ると、成程筆太に記した「産科及婦人科」の看板が懸つてゐる。其れにしては變手古だと、表へ出て例の瓦斯燈を眺めると、何の事だ、チャンと指さしの繪が描いてある、二人は散々面目玉を潰した結果。辛と目指す仙臺家を探し當てたから、ホツと一息、二階へ上つて見れば、纒かに落成した斗りの家で、未だ障紙や襖を張つてない始末。逆も三月の肌寒い時分に居られるものではない。彌よ絶體絶命の破目に

陥つたから、茲に一世一代の智恵を絞り出した三孝。且那如何でせう、這麼時には寧ろ毛色の變つた板橋へでも参りましては、彼地の藤本と來たら、却々面白い青樓で、而も私の極く懇意な家でげすから、且那の御供で参りますれば、第一私の名譽は申すまでも無く主人娼妓の喜び、且つは土地の潤澤にもなる事ではげすが、と巧く持掛けると、其れでは出掛けやうとの御意。仍で三人の藝妓を歸へして、此家の勘定もソコ〜に板橋へ飛付けたが、三孝の案内で上つた一軒の青樓、型の如く酒肴を取りよせ、頓て三四名の藝妓も現はれてのザンザメキ。處で三孝窈かに思ふやう、全體これほどの豪遊をすれば、平常なら必然主婦が諂辭雜りの挨拶をする譯であるが、今日に限つて出て來ないのは、不在なのか知ら、其れとも未だ騒ぎやうが足りないので、顔を見せないであらうか。斯う思つたから更に馬力を掛けて騒

いで見たが、一向に其の効験がない。スルト遅れて来た一人の藝妓が、三孝の顔を見るが否や、オヤお珍しい三孝さん、と聲を掛けたので、三孝ヒヨイと見ると、以前柳橋で知つてゐた藝妓であるから、ヤ一是れは久瀬でしたな、時に此の藤本は二階は無かつたやうだが、近頃建接いだものと見えますよ。と何気なく尋ねると、藝妓は思はず失笑して、何を言つてるの三孝さん、お前さん此家を藤本と思つてるのまア嫌やな人だ、藤本は此の二三軒先ぢや有りませんか、之を聞いた一座は、言合はしたやうに腹を抱へた、道理で主婦が来ない譯だと、三孝今はグウの音も出ない。

▲突 損 じ

明治十八年十二月、今の橋家圓喬が朝太から圓喬と改名した時、翌年早々日本

橋瀬戸物町の伊勢本で眞を打つ下稽古かたぐ、牛込の和良店亭(今の高等演藝館の前身)で、師匠圓朝の作「牡丹燈籠」をやつたところ、幸ひに澤山の聴衆が来たので、本人も一生懸命にやつてゐると、恰ど中日頃、例の忠僕幸助が過つて主人飯島平左衛門へ槍をつける處で、彼がエイといつて突く形をする刹那、拙いツと一聲高く客の中から叫んだ者がある。其れが又た甚く力の有る聲で、五臟六腑へ響渡るやうであつたから、彼は思はずブル〜として、槍の手を止めた。一體今のは何人であらう、兎に角槍術の心得ある人であらうから、歸つて了はぬ内に捉へて教を請はうと、急いで高座を下りると、早くも右の人物は樂屋に来てゐたので、拍子抜けがしたやうに呆然してゐると、右の人物は彼に一瞥をくれて、什麼も甚く拙かつたね、アレぢや人は突けないよ、俺が教へてやるから宅へ来るが宜い、俺はお前の師匠と

直と二人を呼びつけ、決して其様な卑しい事を言つてはならぬ。と頗る不興の體であつたから、二人りは今更面目なく、唯だ只謝りに謝るのみであつた。處へ偶々東京から、圓生(三代目)が大病だといふ電報が掛つたので、圓朝は圓鶴と圓次郎とを連れて東京へ歸つたから、残つた小圓朝に圓雀の二人は、今の内にお座敷を稼いで、一ツ大に儲けやうではないかと、此處に相談一決して、餘り澤山も無かつた懐中から、遣ひ物を拵へて、理髮店、旅館、湯屋等を廻り歩き、情願御座敷がありましたら、宜しく御願ひ申しますと、一々ふれて廻つたのは好かつたが、サア是れから大に儲けるのだと、二人は存りに喜んでゐると、東京から再び電報が来て、圓生が亡つたから、二人とも直に歸つて來いと、是れは弱つたとは思つたが、嚮に輕節の事で圓朝の機嫌を損じてゐる矢先、グズ／＼してゐると、尙ほ／＼不首尾にな

ると考へたから、折角諸方へ配つた物がフイになるのは残り惜いけれど、今更此場合で其様な愚痴も言つてゐられず、其れでは歸る事にしやうとは言つたもの、前に圓朝が歸へる時であれば、別に旅費も要らなかつたのだが、今となつては自分等の財囊で歸へらねばならぬ。といつて既に遣ひ物でハタき出した後であるから、旅費とするだけの金も無く、仕方がないから、二人とも熊谷までは膝栗毛に鞭うち、其處から千住まではガタクリ馬車、自宅へ歸るまでは飲まず食はずの辛さ加減。

▲色男の下落

今の三代目神田伯山が曩に小伯山といつた時分、色男の下落といふ滑稽がある。頃は何時なんめりや、明治二十七年の三月から、翌年の八月へかけて、彼が越後の

三條で興行した事がある。處で地方の習俗として、例の盆踊りが始まつたから、根が好奇心の彼は、最初は面白半分で踊りの中へ加はつてゐたところ、後には肝腎な寄席へ出る事も忘れて了ひ、一切夢中の姿で騒ぎ廻つてゐた。其れといふのは、此の三條には遊女屋が五十二軒からあるので、每晚十二時過ぎる頃まで、遊女屋の前で飛んだらり跳たりして、女郎に何とか椰楡はれるのを、無上の愉快としてゐたからだ。スルト、青玉小路の大塚屋といふ青樓に、お金と呼ぶ鐵火者がゐたが、不圖した譯から彼がこの女と宜い仲になり。お定まりの夫婦約束までも結んだので、彼の嬉しさは如何ばかり、天晴れ明治の丹次郎になつた積りであると、或る宵の寢物語りに、自分は元と村松の藩士で、二百石を取つてゐた熊坂傳右衛門の娘であるが、一家の危急を救はんが爲め、竟に遊女となつたのであるなどと、お金は空涙を漏し

ながら、宜い加減な出鱈目を並べた奴を、惚れたが弱身の彼は、悉く真に受けて了ひ。彌よ夢中になつて通つてゐると、恰ど故人の左團次が角又へ乗込み、五日間の興行が大當りで、町の人は寄ると觸ると芝居の噂ばかり。頓で一座が角又を引揚げると同時に、お金の姿が何時かドロンとなつたので、是れはチツキリ彼奴の差金に相違ないと、大塚屋では彼を疑つて、嚴重な掛合を持たんだ。處が一切寢耳に水の彼は、吃驚して種々と辯疏をして見たが、大塚屋の疑念は如何しても解けぬ。竟に彼は土地の警察へ引張られて、嚴しく訊問を受けたが、知らぬ事は如何しても知らぬと。言ふより外は無く、其の爲め四日間の拘留を食つたので、噫吁情ない事になつたものだと、存りに鬱ぎ込んでゐると、恰かも好し、お金は左團次一座の道具方直吉といふ者と、直江津の方へ墮落をしたといふ報知があつたので、幸と警察署を

放免された。折角上げた色男の價値を、悉皆落して了つた處に愛嬌がある。

▲念佛をもう一ツ

市村座が猿若町に在つた時。故人河竹默阿彌の作「筆屋幸兵衛」を先代菊五郎がやるに就て、先代清元延壽太夫のワキを勤めたのが、今の五代目延壽太夫であつた。今日は一番巧くやつて、叔父(因に彼の實弟菊之助が菊五郎の養子となつた)に褒められたいものだと、一生懸命大汗をかいて語つたまでは宜かつたが、扱て愈よといふ處で、南無阿彌陀佛々々々々と都合四度繰返す奴を、餘り氣を入れてゐた爲めに、間が延びて三度だけしか言へなかつたが、本人は一向に氣がつかず。實は十分巧くやつた積りか何かで、幕になると床を下りて、平常の控所へ入つて憩んでゐると、心の

沈着くに随つて、何だか變でならない。奈何いふ譯だらうと、種々考へてゐる處へ菊五郎から一寸來いを喰つたので、慌て、樂屋く駆着けて見ると、菊五郎は彼の顔を眺めて、明日から念佛をもう一ツ餘計に唱へて呉んす。

▲舞臺へ腰を抜かす

安政の夏の頃、赤坂溜池の戸田邸で、能舞臺一面に敷物を布いて、長唄會を催ふした事があつた。素より招かれた連中は、當時屈指の人物ばかりで、藤田音藏、二代目吉住小四郎、十代目杵屋六左衛門、吉住小八、藤間勘左衛門(勘右衛門にあらず)杵屋喜三郎等であつたが、「翁千歳」を演つたところ、能舞臺であるから、割合に能く響いて、一同今日は上出来と悦んで舞臺を降りたが、如何いふ譯か、勘左衛

門一人は舞臺へ坐つた儘、静としてゐる。ハテ變だナとは思つたが、別に氣にも止めずに一同が行かうとすると、ドタンと物の轉倒つたやうな音がしたので、小四郎に小八の兩人が駈着けて見ると、勘左衛門が三味線を握つた儘、仰向様に倒れてゐたから、二人は驚いて之を室の内へ擔込む、戸田侯は何事かと心配して醫師を招ぶ。一時はなか／＼の騒動であつたが、後で訊けば、何の仔細も無い話で、勘左衛門が餘り長く坐つてゐた爲め、足部に痺が切れて立てなかつた奴を、無理に立たうとした機に、過つて轉倒つたのであつた。

▲三日ハイカラ

先代菊五郎、先代秀蘭等の一座が、横濱の某座で興行した時の咄。當時一般に頭

髪を分ける事が流行つた爲め、今の杵屋勘五郎が主唱者となつて、出囃子十四人、残らずハイカラ頭に變化した。丁度其の時の狂言が『六歌仙』で、菊五郎の喜撰が舞臺で踊りながら、折り／＼囃子方の方を見ては、クスリ／＼笑つてゐる、頓て幕になると、菊五郎が喜撰の着附その儘でやつて来て、全體皆なは如何したんだ。と甚く揶揄はれたので、再び元のイガ栗に逆戻り。

▲高座の下の大軒

是は都々逸坊扇歌が、若い時分の失策談。恰ど小石川傳通院の前に在つた瓦屋といふ寄席に、師匠の燕枝が出でゐたので、彼は其の前座を勤めてゐたところ、或る晩のこと、存りに睡氣が備ふして、居ても立つても堪らなくなつたから、悪い事と

は知りながらも、ツイ高座の下へ潜込んで、頓て前後も知らず寝込んで了つた。スルト其の眞聲が「ブー」と鳴り亘る爲め、何時か聴衆の耳へ入り、如何にも妨碍になるから、客の一人が其の由を席亭へ知らせると、席亭は多分客の中に寝てゐる者があると思ひ、中賣を遣つて起こさうとしたが、別段客の中には寝てゐる者も見當らないので、ハテ奇態な事があるものだ、其の儘に捨て措いたところ、頓てツナギに上つてゐた燕路が、今しも燕枝が乗込んだ報知をきいたので高座を下りて見ると例の彼が前後不覺の有様であるから、燕路は此の野郎ツといひながら頭上をホカリ。

▲馬鹿野郎ツ

今の望月太左衛門が若い折り、舊の千歳座(明治座の前名)の舞臺開きに「對面會

我」の狂言へ出たところ、團十郎の五郎が、戴さすすべい、戴さすすべい。の臺詞があつて型の如く三寶へ手を掛け、キツと見えをする處で、打つべき御代神樂の太鼓を、彼は餘りに氣を入れてゐた爲め、團十郎が例の如く、戴さすすべいと言ひ終るや、未だ見えにも掛からの内に、俟つてゐたと言はぬばかり、ドンと一ツ打込んだので、團十郎は我れを忘れて、馬鹿野郎ツ。

▲向島土手下の喜劇

明治卅九年の十一月、しかも六日の午後七時頃、芝の某といふ娼客が、向島の八百松から電話を掛けて、天神の幫間揚羽家徳二を招んだ事がある。スルト徳二は喜び勇んで飛出したものゝ、扱て情々考ふるには、いくら客人に拂つて貰うからと

は云へ此處から向嶋まで俵を飛ばすのも物載ない譯だと、一番妙な所へ義侠心を絞出して、吾妻橋までは電車の便を藉り、頓て其所から俵を儲つて駈出したところ、恰と中の植半の前邊へ來ると、車夫は停立つて了い、且那まことに濟みませんが、何卒此處で下りて載きたい、私はリョーマチを煩つて居りますので、最早迎も一歩も挽けません。車夫の聲は如何にも苦しうで、泣かん許りに頼む奴を、無理に挽張れとも言ひ兼ね、迷惑な話だとは思つたが、云ふが儘に俵を下りて、テク／＼歩き出して纒が一丁ばかり、持病の喘息は猛烈に彼を襲ふて來た。ヨリヤ堪らぬ、如何したら宜からうと、苦しい中にも四邊を顧盼した、生憎立寄るべき家も無い、彌よ困つて悶躁いてゐると、幸ひ土手下に一軒の荒物屋が見當つたので、天の祐助と右の荒物屋へ轉げ込み、拜むやうにして煙草盆を借受け、平常懷中に用意してゐた

嗅ぎ藥を抽出して火の中へ煮べ、姑らく其の上で鼻を煮かしてゐたが、間もなく絶つて棄てたやうに治つたので、ヤレ嬉しやと立ちかける刹那、慌しく駈け來つた一人の巡查。唐突彼に向つて、お前は虎列拉に罹つたのだらう、包まず事實を言つた方が宜い、髭を捻つて鹿爪らしく迫つて來る。意外の訊問に面喰つた彼は、イヤ飛んだ御冗談を、實は是々爾々の譯ですと、事の次第を逐一物語つたので、餘りの輕卒に巡查も道が面伏な様子、是れは本來荒物屋の妻君の勘違から起つた事で、最初徳二が此家へ駈込んだ時の様子から、必然これは虎列拉患者に舞込まれたものと早合點して、直と最寄の交番へ其の由を知らせた爲め、查公が取敢へず出張した譯であつた、疑團氷解。查公は佩劍鏘々と去つて了う。打つて變つた彼の容體に驚いた妻君は呆然して至で狐に摘まれたやう。彼は失笑したさを怵へて、厚く禮を述べた

なり、門口を出るや、八百松を目覚めて一目散。

▲千秋の恨事

講談界の宿老、柴田馨が卅年ばかり前の失策。或る時彼と故人南龍、邑井貞吉(今の一人)の三人が、數名の藝妓を連れて、水神の八百松へと遊びに出掛けた。途中は固より船でいつたが、三圍の近くへ來ると、彼が煙草の吸殻を叩く拍子に、金の雁首が飛んだから、無論川の中へ落ちたものと思ひ、惜い事をしたと悔んだが、藝妓の手前、其様な泣ッ面もしてゐられず。エ、一ツ氣前を見せてやれと、止せば宜かつたのに、吸口だけ有つても仕様がなから、是れも序に棄て、了はうと、吸口を川の中へ抛り込んだ、其内船が八百松の棧橋へ着いたので、一同上つて家へ入つた

が、後から船頭が來て、船の跡片付りを爲ましたらば、雁首がありましたと彼に差出した時、其れなら吸口を打捨るのではなかつたと悔んだが、今更雁首ばかりも受取れないから、實は惜しくつて堪らないのだけれど、お前に與らう。

▲店頭で煙に捲かる

今から十二三年前。カッポレで有名な豊年齋梅八が、横濱の割間櫻川孝次、長孝、多孝などの連中と一緒に、米國シカゴの大博覽會へ行つた折、或る日彼は襦衣を一枚買ふべく、一軒の店へ立寄ると、番頭はお世辭たらしく、種々の品を取出して見せ、是れは五十仙、是れは一弗と、何か荐りにベラ〜饒舌してゐるが價額の五十仙と一弗は何うか斯うか解つたから、何方を買はうかしらと、暫時見

比べてゐたところ、番頭は又た彼が高價いので買はないのかと思ひ、別にわざ／＼仕入帳めいた物を持出して、頻りと何だか解らぬ事を並べてゐる。併し彼には陳分漢。此處しばし烟に巻かれた體であつた。

▲四ツ谷怪談

と言つても、今更お岩の癖をするのではない。今の竹本小清がまだ大阪で藝妓をしてゐた頃、堂島の仲買人濱井某といふ男が、一日多人数の朋友を引張つて茶屋へ上つた折に彼女も招かれた藝妓の一人であつたが、旋て客の一人が、俺が四ツ谷怪談を語るから、何人か三絃を頼むよと、言つたけれど、如何いふ譯か、大勢ゐた藝妓が互に譲合つて、一人として弾かうと云ふ者が無い、何時まで過つても際限がな

いから、夫れぢや妾が勤めませうと、茲で彼女が右の客の合方になつて見ると、客の手際はなかく大したもの、亦客の方でも彼女の技倆に感伏してゐる様子、旋て一段語り終ると藝妓は口々に、お前さんは生意氣だよ、彌太夫さんの合方をするなぞとは、と甚く罵るので、扱ては此の人が竹本彌太夫であつたかと、一時は驚いたもの、自分も四ツ谷怪談を知つてゐたから弾ひたまでの話、何も不都合な譯は有るまいと、思つたが、貴方が竹本のお師匠様で御座いましたか、ツイ存じませんで飛んだ失禮を致しました、と詫入るだ、イヤ失禮も何もない。よく合方になつてくれた、一體お前は何人に習つたのか、却々巧いもんだね、第一俺に能く調和ふのが不思議だ、と彌太夫に訊かれたから、少々許り父に教はりましたので。なにお父さんに、してお前のお父さんといふは、ハイ鶴澤清八で御座います。聽て吃驚した彌

大夫、イヤ是れは濟みませんでした。實は藝妓を窺める心算の洒落で、最初からお前さんと知つたら、這座事をするのでは無かつた何卒悪しからず、又た師匠へは秘密に頼みます。旋て彌大夫は狐鼠々々と歸つた。

▲胡蘿の切り口

是れは極く短い話。浪花節の鬼才、一心亭辰雄が、小吉といつて未だ十二斗りの頃。兄弟子の綱吉が、彼に二錢銅貨を持たせて、近所へ何か買物にやると、彼は直に戻つて来て兄さん、是れはお錢じゃありません、這座ものでした。と綱吉の見えない眼の側へ差出したのが胡蘿の切り口。

▲近頃は睡られるか

今の三遊亭圓右が三橋といつた往時、毎日日本郷元町の自宅から、本所南二葉町の故人圓朝方へ通つて、幾んど六個月許りも稽古を續けてゐた。一日例の如く師匠の家へ行くと、圓朝は平常になく彼に向つて、お前は近頃は睡られるか、と訊くから、へイ能く眠られます、時々朝寝坊をする位です、何心無く答ると、左様だらう若い者だから仕方はない、併し俺なんぞが修業した時分は一晚でも悠然眠つたことはない。四六時中藝道の事ばかり、考へて、彼處はあゝ演つて、此處は斯ういふ風になぞと、少しでも餘閑があれば、必と那座事に心を配つてゐたから、如何して逆も眠れる所の騒ぎぢやなかつた、現に昨夜も寄席から歸ると、直ぐお前の臺詞書を書き出し机に向つた切り、終う今朝までマンチリとも爲なかつた、と言はれた時彼は宛然自分が大罪でも犯したやうに、倏ち良心の苛責を受け、唯もう下俯向いた

まゝ、無言であること稍や少時。

▲溝の中へ眞ッ逆様

修羅場讀の名人、故人小金井蘆洲が辛と賣出した時分、或る晩例の如く寄席を終つて、チク／＼歸りながら、丁度下谷の廣徳寺前まで來ると、既に夜も更けて彼れ是れ一時過ぎ、四邊は閑寂して、至で天地は死んでゐるかと思はせ、氣丈の彼も何となく薄氣味悪く覺えて、自然と渾身へ顛ひが來やうとする矢先、突然に頭の上で凄じい大きな音がした。ハッと思つて上を見る眼に映つたのは、性體も解らぬ大きな光り物。餘りの怖さに駆出さうとした刹那、側にあつた石角に足を掬はれ無慘や路傍の溝の中へ眞ッ逆様。

▲後足で砂

三遊亭遊三が一時落語家を廢めて、司法省の使部へ奉職してゐた時分。彼を司法省へ斡旋した、築地區裁判所の五等判事で、平野芳方といふ人が、北海道國館裁判所へ轉任する事になつたから、お前も一緒に持つてはとの話に、彼は喜んで従ひて行つた、愈々函館へ着くと、彼は相生町の素人屋の二階を借りて、其處から毎日裁判所へ通つてゐたが、途中に一軒の煙草屋があつて、其處に店番をしてゐる女が、三十格好の別嬪であつたから、這塵土地にも美人があるもんだなアと、店の前を往來する毎に、彼は密と一瞥を與ふるのであつた。頓て一と月も過つた時分、右の美人が高利貸に訴へられて、偶々其れが彼の係りになつたから、彼は美人の肩を持つ

た譯ではないが、兎に角高利貸をして非常に不利益の地位に立たしめたので、美人は大喜びで歸へつて了つた。スルト其れから二三日後の事、彼は例の店へ煙草を買ひに行くと、美人は、先日は何うも有難う存じました、是非情願奥へ御通り下さいまし、何人も居りません、妾と女中はかりで御座いますからと、味に搦んで款待するので、彼も宥められる儘、座敷へ通つて、頓て美人の酌で一杯傾ける運びになつたが、平素些か情を寄せてゐた美人であるから、彼は内心大に喜んで、密かに美人の様子を覗つて見ると、美人の方でも何となく情ありげな風情。こいつは嬉しいと思つたから、試みに、姐さん、此の次に日曜に何處かへ出遊ませうか、と言ふと、ハア是非どうぞ、妾樂みにして待つてゐますから、といふ返事。彌よ此方の物になつたと、彼は心の中に怡びを包んで、其の日は其の儘歸へつたが、サア次の日曜が

待遠で堪らぬ。頓てお待遠様とも何とも言はずに日曜が来ると、例の美人が彼の下宿へ訪ねて来たので、彼は悦び勇んで飛出さうとすると、下宿の主人が彼に密と注意をした、貴方は彼の女と何處へ被入るか知りませんが、まアお止しなすつた方が宜う御座いますよ。貴方は未だ土地の事情を能く御存じないから、無理ではありませんが、彼の女はなか／＼の代物で、此の函館でも有名な淫賣婦です。貴方が倘しも彼奴に關係つたが最期、其れこそ飛んだ目に遇ひますから、断然お止しなすつた方が御爲めでせうよ、其れに過日の裁判で、貴方が彼奴の肩を持つたとか、依估最負の裁判をしたとかいふ世評のある矢先、萬一の事があつては詰りませんから、此處は一應お考勘なすつたら如何でせう。と折角親切に言つて呉れたけれど、既に情火炎々として身を焼かれつゝある彼は、却々主人の注意などが耳に入るものでない

可いから。御心配には及ばぬと斗り、彼は美人と一緒に、入ら頭といふ温泉へ出掛けたが、迎も日曜一日だけでは十分の興を盡くせぬから、裁判所へは病氣届を出して、四五日夢中になつて戯けてゐると、何時か此の事が所長(平野芳方)へ知れたから、彼は直と呼びつけられて、實は免職にもすべき處だが、共れでは餘り氣の毒であるから、辭表を出したら宜からう。といふ話で、困つた事になつたとは思つたが是れも自業自得で已を得んから、早速其の手續に及ぼうとした時、恰度判事補の中山といふ人が、江差の區裁判所へ所長となつて行くので、彼を其所へ轉任させる事にした、然るに彼が江差へ着いた三日目、例の美人が追駈けて來たので、其れから二人は三月餘も一緒になつてゐたが、其の内彼が東京から持つて來た金も、今は幾んど消費して丁ひ、多少所有つた衣類も、全く失つたのみならず、諸所に不義理の

借金さへ出來て、何うにも足掻が取れなくなると、美人は何時かドロンと消えたので、今更彼は切齒をして見たが、時すでに遅しであつた。右の美人は、お糸といつて、下宿の主人が注意をした通り、非常なる鐵火者で、現に船乗りの亭主を有らなから、有らゆる男を盡惑してゐた妖婦。

▲小田原の活劇

川上音二郎が一座を組織して間もなく、横濱の興行を了つて、直と横須賀の桐座へ乗込んだが、狂言は固より殺風景の物ばかり、其れに材料が竭きると、新聞の雜報を引張り出して、芝居に脚色むといふ情態。いよく窮して來ると、舞臺で何か過激な演説でもやつて、中止されるのを寧ろ俟つてゐる位。今日から考へると、隨

分突拍子もないやり方であつた。這麼工合であつたから、俳優といふも實は名ばかり、純然たる壯士の團體も同じ事で、成らう事なら喧嘩の一ツもやつて見たい連中謂は、卑肉の欺に堪へぬ折りから、端なくも茲に眞物の壯士と衝突して、一大活劇を演じた話がある、元來此の横須賀の界限には、自由黨の荒くれ壯士が跋扈してゐたが、既に一座が乗込んだ時、彼等に渡りを附けなかつたのが、そもく彼等が立腹の端緒。折りがあつたらば一泡吹かしてやらうと、手具脛引いて俟つてゐるとも知らぬ一座は、一日郡書記の某が泥酔に乗じて芝居小屋に暴込んだ奴を、氣早の連中何乗たまるべき、寄つて集つて殴りつけた事が、例の壯士連の耳へ入つたので時こそ來たれと、壯士連は大舉して桐座を襲ふた併し固より腕力黨の一座、退かばこそ通ればこそ、同じく腕を揮つて迎へ戦かつたから其の混雜は非常なもので、

火鉢は飛ぶ、洋燈は墮ちる、道具は破れる、此の世からなる修羅の巻を現出した。其折り婦人に扮してゐた藤澤淺二郎は、舞臺の衣装その儘、姫御前のあられもなき拳骨を振り固めて、奮戦格闘大に努めたのであつたが、嘸ぞかし滑稽であつたらうと思はれる。頓て警官の出張によつて漸く静まつたさうだ。

▲荷物の中から人間の生首

先年川上一座が歐洲列邦を巡業した折り、ポーランドから露都セント、ピータースバーグへ向つた途中、露領ワルソーへ掛かると、税關の役員に各自の荷物を調べられた。一體歐羅巴の中でも殊に露西亞と來ては旅客の調べが極めて嚴重な爲め、無辜の旅客にして、往々五日若くは一週間も、抑留される例がある、今しも一行を圍

遠いた役員は、何か解らぬ事を喋々いひながら、荐りに荷物を調べてゐたが、突然生々しき人間の首、一個の荷物から拵へ物の生首やら、サーベル、鐵砲等が飛出したので、役員は一同呀と云つた切り、姑らく一行の顔を凝視してゐたが、サー一行を烏論の者と恠しんで、如何しても通さしてくれぬ、種々と手真似で辨疏をしたが、駄目、強ひて通りたくば、公使館の證明書を出せと迫る。厄介な話だとは思つたが仕方がない。茲に證明書を取寄せる爲め、一行は最寄の停車場で夜を明した、後で其れが演劇の道具と判つて大笑ひ。

▲旅は懲り々々

今の寶井馬琴が、まだ琴凌といつた時分、例の放蕩に身を持崩した揚句、平素打

ち解てゐた初代の貞國、故人桃川實の弟子の團五、右二人の仲間を連れて、東京を飛出したのが、明治十二の夏であつた、最初皮切りの興行が、横須賀の某席で、非常な不入であつた爲め、食費は固より、湯錢までも席亭から借りる始末、如何したら宜からうと、荐りに心配してゐる處へ、土地の貸座敷の隠居が、病氣で臥てゐる退屈であるから、何卒毎日宅へ来て、伊達評定を講んで貰ひたい、といふ話であるから、渡るに船と喜んだ彼は、早速右の貸座敷へ出掛けて、一生懸命に講むこと毎日四席、都合十日を以て講了となつたので、是れでは可なり貰へるだらうと思つてゐると、頓て禮として寄越したのが、纒かに參圓、随分人を莫迦にしてゐると、怒つて見ても始まらないから、一先づ席亭の借金を拂ひ、直と藤澤へ行つて、松の家といふ寄席で興行すると、今度は可なりの入りで、三人とも多少の收得はあつたけ

れど、頓て下らぬ事に遣つて了ひ、愈よ廿四日の興行を終つていざ、出立となると三人とも囊中既に無一物の有様。仕方がないから、次に乗込む筈の静岡の寄席から乗金として十圓だけ送つて貰ひ、其金で漸やく三人揃ひの單衣を着て、藤澤を出發したが、途中三人とも同じ白の洋傘を翳して、今や平塚の宿へ來ると、一人の男がやつて來て、私は向の近江屋といふ貸座敷の者だが、五十錢だけ演つて貰ひたい、といふ様子が訝しいから、全體お前さんは、私等を何者と思つてお居でたと訊くと其男は恠訝な顔をしながら、お前さん等は、ヤートコセーちやアないのですかい。是れには三人とも腹を抱へた、成程揃ひの單衣を着てゐるから、左様思ふのも無理ではない。併し何程なんでも、ヤートコセーに見立てられたのは、餘り名譽でもないから三人とも少しく聲を荒らげて、這歴見えても、東京の講談師だ餘り人を蔑視つ

て貰うまいと、威嚇しつけると、其の男は吃驚して、是れは飛んだ失禮を致しました、相済みませんと言つた儘、向ふの家へ姿を隠した。三人は笑ひながら平塚を後にしたが、愈よ静岡へ乗込んだところ、此地の興行が思はしくなく、續いて清水港へ行つたが、是れも物にならない不入、茲に萬策竭きて、一先づ貞國と團玉の二人を東京へ歸へしたが、其の旅費にしても、種々算談をして辛と出來た様子。仍で後に残つた彼は、難關を排しながら、沼津、三島、熱海などを廻つてゐたが、旋て三崎へ來ると、偶ま非常な大漁で、漁夫は目の廻る程忙しい折であつたから、迎も興行は覺束ない、と云つて他所へ行くだけの旅金も無く、其れに追々秋口へ向つて來るのに、着た切りの單衣一枚であるから、流石大胆の彼も、途方に暮れて弱つてゐると、或る寄席の主人が、近頃は毎日鮪が澤山漁れるので、船から運搬する輕子

が要るのです、如何です一ツ輕子になつて見ては、可なり宜い手間賃が取れますせ
と勸めて呉れたから、實は輕子とは情ない譯だと思つたが、今此の場合で、那麽發
澤を云つてゐる事も能ず、脊に腹は更へられないから、其れではお前さんから頼ん
で下さいと、輕子になつては見たもの、何しろやりつけない仕事であるから、直
と肩を腫して了ひ、逆も忍耐がなくなつたので、其の譯を席亭の主人へ話すと、
困りましたねえ、其れでは鮪のすき身の方を手傳つて御覽なさい、是れは別段骨の
折れる事ではなし、唯だ鮪の身へ鹽を塗抹けさへすれば宜いのですからと、言ふ雜作
ない話なので、再び其れを遣つて見たが、成程六ヶ敷い事ではないけれど、直と手
の皮を摺削いて、痛くて堪らないから、是れも三日許りで止て了ひ、茲にいよく
東京へ歸へる事に決心して、右の席亭の主人へ頼み、三崎から魚河岸へ行く船へ乗

せて貰ひ、久方ぶり東京へ歸つたが、自宅へ着くや否や、吻と一息、旅は最早懲
り々々だ。

▲御馳走の當違ひ

明治廿六年の二月、淺草の馬道、俗に富士横丁に火事があつた折り、先代の壽美
藏が弟子二人を連れて、最負客の見舞にいつた歸途、例の矢大臣門の前へ來ると、
圖らず先代の芝翫に邂逅つたから、二人は種々と火事の噂なぞをしてゐたが、旋て
芝翫が、何うだね、蕎麥でも食はうぢやないか、と言ふから、壽美藏初め二人の弟
子も、芝翫は目上の優ではあるし、殊に自分から言出した事であれば、是れは無
芝翫の御馳走であらうと、仍で最奇の蕎麥屋へ入り、各自に天麩羅を注文して、思

ふ儘にやつてゐたところ、芝翫は自分のを平げると、勘定も拂はず、サツサと歸つて了つたので、後に残つた三人は、オヤ／＼。

▲チヨボ話りのドロソ

明治廿四年の十月、仙臺市は仙臺座の、開業式に、故人の坂東家橋が座頭で、同じく先代壽美藏、中村福助(今の歌玉)中村勘五郎、故人岩井松之助、中村傳五郎、市川女寅等の一座が『忠臣藏』を演つた折り初日と二日目とは、首尾好く喝采の裡に終たが、扱ていよ／＼三日目の序幕、例の鶴ヶ岡八幡宮の場で幕が明くと、型の如く東西々々の静止が掛つて、足利真義を始め、一同の諸大名が頭を下げる、スル／＼如何した譯か「佳看ありと雖」云々の義太夫が入らぬ爲め、一同は頭を下げた儘、

幾んど廿分餘も静としてゐた、餘りのことに家橋が密と床の方を見ると、サア大變。床には義太夫の久我太夫も居なければ、無論三絃の宗七も見えぬ、是れや困つた事が出来たと思つたが、今此の場合に溢んで、別に巧い考へも浮ばないから、竟に義太夫無しで胡魔化して了つた、一體如何した手違から、這麼失態をやつたかと云ふに、前夜、義太夫の久我太夫が、給金の事で腹を立て、無責任にも其儘遁んで了つた奴を、知つてゐたのは三絃の宗七(鶴澤)一人であつたが、ツイ言出し兼ねたところ、愈よ今幕が明くといふ間際になつたから、居た堪らくなつて、旅宿へ逃げ戻つたなり、桑原々々で頭へてゐた。是れがそも／＼失態の原因。

▲お軽の入湯

是れは前話の續きで、此時家橋の立腹は一通りでなく、莫迦々々しい全で仙臺下りまで耻辱を掻きに来たやうなものだ、俺はもう歸京つて了うと、却々甚い劍幕であつた奴を、太夫元の高田梅吉——昨年死亡した人で、明治座の茶屋花屋の主人——やら、善美藏、福助等が種々と宥めたので、辛と納まりは着いたものゝ、早速迷惑を感じたのは義太夫の一件。其れで奥役の某は直と東京へ別の太夫を備ひに行つたが、迎も今日の間都合譯はないから、例の梅吉は血眼になつて仙臺中を駆廻つた結果、辛と一人寄席へ出てゐた義太夫語りを捉へると、是れが一日百圓でなくては嫌やだといふ、随分高い給金とは思つたが、脊に腹は更へられぬ比喩、茲で

いよいよ右の男を備つて見ると、何しろ普通の義太夫であるから、俳優の呼吸と合はぬこと夥しい、俳優が呆然思入れでもやつてゐるやうものなら、義太夫の方ではドーンとお構ひ無しに先走つて了ふので、俳優は面喰つて追駈けて行くといふ滑稽。言座事で如何なるだらうと、各自心を痛めてゐる矢先に、歸つて來たのが例の奥役某で、無論一人の義太夫語りを引つ張つて來たから、一同は茲に始めて愁眉を開いて、いよいよ是れからといふ翌日、即ち五日目の朝、例の如く俳優一同が義太夫語りと打合をしたのが、案外に時間を取つた爲め、開演の間に合なくなつたから、道行の一場だけを除く事に決めて、茲に漸やく二段目を終つたが、如何いふ手落であつたか、右の由を道具の方へ通さなかつた爲め、何にも知らぬ道具師は次の舞臺へ三段目の道具を飾着けた。スルト家橋が、其れぢや演つ終はうと言ふので、衆議

邊かに一變して、愈々其れといふ事に決まつたが、一人お輕の持役であつた松之助だけは、其の事を知らなかつた。仍でいよく幕が明ひて、頓てお輕の出演になつたが、一向に松之助が出て來ぬ、床にゐた先代延壽太夫は、一回語つた淨瑠璃を、再び繰返しゐるが、未だ見えぬ、家橘はもどかしがつて、松之助を招びにやると、是れは又た何の事、もと／＼其様な譯になつたとは知らぬ松之助は、今や好い必持になつて、鼻歌か何かで湯を浴びてゐる處。

▲越中の嫌疑

昨年十月下旬、落語家の三遊亭小圓朝を筆頭に、同圓流、金之助、金彌、朝笑(今の揚羽家蝶六)其れに清國人の華玉川等の連中が、名古屋へ出掛けて、同市富本町

の富本亭で興行した處、案外の不入續きで、每晚幾んど五十人位の平均であつたから、一同大弱りに弱つてゐると、獨り座長の小圓朝のみは暢氣なもので、山城屋といふ旅館の二階へ籠居つたまゝ、平素大好物の弄花に耽つてゐた。スルトいよく寄席は今夜限り、明日は東京へ歸へるといふ間際になつても、相變らず一件に耽溺んでゐるから、門人等は密かに心配してゐると、既に席へ出る刻限に迫つたが、一向無頓着で弄つてゐる。寄席の方では彼の前席へ出る藝人が、高座を下りて了つたけれど、更に彼の來る様子もないから、客は待草臥れて、如何したんだ、出演ないのか、等と叫んで、荐りに喧々噪いでゐる、見るに觀かねたから、門人の朝崎が山城屋へ飛着けて彼に右の由を話すと、彼は始めて氣が着いたやうに、慌て、宿を駆出したのは宜いが、寄席へ入つてヒョイと見ると、宿屋の上草履を穿いた儘でゐる

から、自分ながらも可笑しく、無論門人等は腹を抱へて笑つてゐる。仍で彼はトリを済まして、山城屋へ戻つて来たが、亦たもや弄花を始めたので、明日歸京といふ間に、何の事だらうと、門人等はブツ／＼證いてゐたが、兎に角構はず荷造りをしやうと、是れから一同が荷物を擲げて、ドシ／＼下へ持出したけれど、彼は其様な事には頓着なく、三時過ぎまでも夢中で弄つてゐた爲め、翌朝六時に出立つ際には、可笑しい程大狼狽に慌て、宿屋へ取落した物があることをも知らず、倉皇々々流車へ飛込んで、頓て東京へ歸着いたのが、廿九日の午後八時頃。スルト三四日過つて、淺草船河原町の自宅へ一個の小包が到着いたから、妻君が受取つて見ると、差出人は例の山城屋としてゐるので、何であらうと開けて見ると中から飛出した物品は、越中禪が一筋に、半股引が一ツ、扱てはと思つた妻君、變な所へ氣を

廻はして、過日の興行中、良人は必然宿屋の女中と妙な仲になつたのだよと、平素彼が濱町の妾宅(小芳屋といふ待合)へ入浸りになつてゐるのを、面白からず一處ではない、焼いて焼いて焼き抜いてゐた妻君は、時こそ来たれ、好い幸ひ、斯ういふときは無念晴しを爲なければ、爲る機会が無いと思つたから、歸宅つて来る彼の顔を見るや否や、唐突彼の胸倉を捉へて、お前はまアお前はまア……處が是れは飛んだ邪推で、實は彼が名古屋を出立する時、餘りに慌てた結果、遂ひ宿屋へ取落していつた奴を、宿屋で態々送り届けて呉れたのだ。

慧星

是れも小圓朝一座が去年の八月七日から、參州豊橋の彌生座で興行中の珍談。其

の折り小圓朝は素より、松雨、松水、華玉川の連中だけは、上傳馬町の熊野屋といふ上等の旅館にゐたが、後の門人等即ち朝笑、金彌、圓流、朝騎など都合七人の手合は、同じ町の京川屋といふのへ泊つてゐた、スルト其の旅館にお金と呼ぶ十七八の一寸濫皮の剝けかゝつた女中がゐたが、或る晩朝笑の寝てゐる側へ来て、何か若りにモチ／＼やつてゐる様子。朝笑はハ、ア此奴は少々御座つてゐる、と一時は甚く喜んだもの、気が着いて見ると、自分の直き傍に寝てゐた金彌に朝騎の二人が睡た振りをして、實は密かに此方の動靜を窺つてゐるから、是れは迂つかりした事は出来ぬワイと、大に寶の山へ入りながらの感慨でゐると頓てお金は彼に向つて、貴方、もう慧星が現る時分ですから、見やうちやありませんかと言ふ。野心漫々たる彼は御苦勞千萬にも寢床を抜出して、お金と一緒に二階の欄干へ靠れて見てゐた

が、慧星はまだなか／＼現さうもない。スルト何時の間にか、例の金彌、朝騎の二人も起出して、同じく若りに天空を眺めてゐる。幾んど一時間も過つた頃、幸と慧星が見えたので、先づは安心して各自床の中へ潜入したが、朝笑にお金の二人は後方の四疊半の座敷に、宵歸りの客に敷いた寢床が、まだ其儘になつてゐたから、是れ幸はひと、茲に圖らず巫山の夢を結んだ、何人も知るまいと思つてゐると、チヤアンと金彌と朝騎に嗅出されて、最後には小圓朝の耳へ入つたから、小圓朝は彼を慧星と呼んでゐた、頓て興行も終局に近づいた時分、彼はお金から若干か金を借りて、途中で何か美味い物でも食はうと思つたから、一夜お金へ相談をすると、お金は如何にも銷氣返つた風で、其れや貴郎の事でも、爲て上げたいは山々ですが、何をいふにも一月僅か二圓の給金を貰つてゐる妾、逆も金銭の工面はできません

んと、力なげに断つたが、其所は女心の優しさで、彼が出立の間際になつて、汽車の中で喫べて下さい。と呉れた物は、紙に包んだ、ゆで玉子が三個。

▲水甕の中へドブ

十四五年も以前の話。今の文の家、りしが、まだ楓枝といつて今日でも在るが、深川富吉町の富吉亭へ出てゐた時分、某夜富吉亭の近傍に火事があつたから、彼は日本橋の品川町の自宅から、一坐懸命で寄席へ駆着けて見ると、寄席は幸ひ無事であつたので、席亭は大喜び、仍て酒などを出して彼を勞つたが、素よりいける口とて、餘り飲過した爲め、當夜は其席へ泊ることにした。スルト其席の女中で、美人といふ程ではないが、一寸愛くるしい娘がゐた奴を、平常密かに戀情を寄せてゐた

彼は、今夜當席へ泊つたを幸ひ、一番夜襲を試みてやらうと、寢る時には堅く決心してゐたものゝ、何しろ甚く酔つてゐる事であるから、遂に睡過して了ひ、不圖眼を開けた時分は、既に黎明間近になつてゐる。併し先生其様な事には無頓着で、密と寢床を這出したまゝ、踉ける足を踐縮めながら、手探りにやつて來たのは、女中の寢てゐる所と思つたのは誤り、實は戸迷をして臺所の口であつた、併し素より酔つてゐる彼は、其様な事とは一向氣着かず、今や一步踏み出さうとして、偶々開き掛つてゐた開戸へ跌いたから、思はず前方へ踢つた柏子に、呀といふ間もなく、下に在つた大きな水甕の中へドブ。

▲敷島と大和

宛然煙草の話のやうで、實は全く相違つてゐる。確か明治廿七八年の交、先代の壽美藏が、歌舞伎座で、何かの狂言に出演してゐた折り、或る日門弟の登九藏——一寸断つて措くが、是れは今の揚羽家徳二の——を招んで、今夜お化け横丁へ行くから、お前は一足先へ往つて、例の彼女を待たして措くやうに、といふ命令。登九藏は委細其の旨を承知して、直ぐと出掛けたが、抑もお化け横丁といつば、下谷のお化け横丁の敷島といふ待合、例の彼女とは、福田家の藝妓で、今は某の妾になつてゐるが、其の頃は幾んど壽美藏の情婦であつた輝代を意味するのだ。仍で登九藏は敷島へ着くと、早速輝代を招んで、今に親方が来るからと、二人は世間話などを爲しながら、稍や少時俟つてゐたが、既に來べき筈の壽美藏が、如何した譯か。一向に姿を見せぬ。夜に入つてから餘程になるけれど、更に來る様子がないので、今は二

人も俟草臥れて了ひ、一體親方は如何したのだらうと、只管言續ける斗りであつた話頭一轉、壽美藏の方では、歌舞伎座を終ふと、故人の權十郎と飯を食ひに行つたが、根がなかくの飲酒家だけに、一杯一杯又一杯、既に料理店を出た時分には醉眼朦朧として、歩様も餘程危なさうであつた、仍で彼は例のお化け横丁へ俵を飛ばしたが、唯だ待合へやれと斗り、別に敷島とも何とも言はないから、車夫はお化け横丁へ來たには來たものゝ、豈夫敷島へ看ける事とは知らず、其れに敷島の家構が一寸待合らしく見えないので、車夫は其の眞向ふの大和へ引つ張り込んだ奴を、十二分に酔つてゐる壽美藏は、異つた待合へ來たとは氣附ず、矢張り例の敷島の積りか何かで、座敷へ通ると、直ぐ輝代を招んで呉れといふ、女中は輝代を迎ひにいつたが、今お座敷へ出てゐるとの挨拶で、歸つて其の旨を彼へ告げると、彼は其様な

筈はない、是非連れて来いと迫るから、女中は再び招びにゆく、見番からは敷島へ行つて、輝代に座敷を貰つて来てと頼むのだが、輝代は固より壽美藏が大和へ来てゐるとは知らないから、今夜は如何しても他の座敷へは出られぬと断はる、仕方がないから、右の次第を大和へ傳へると、大和から又々迎ひにゆく、其れや是れやで幾んど二時間餘も費したが、其の内壽美藏が酔分か酔が醒めたものと見え、不關氣が着いて見ると、實は大和へ来てゐたもので是れは失策つたと思つたから、直に勘定を済して、倉皇々々に表へ出たものゝ、其の足で向ふへ入るのも、餘り愛嬌が無さ過ぎると、其所は有繫に苦勞人だけに、態々俾て近所を一周廻つた後、敷島の座敷へ通つて見ると、輝代は餘りの事に待あぐんで了ひ、蒲團を一枚被つたまゝ、肝の聲グウ／＼。

▲意外の勘定

都々逸坊扇歌が、まだつばめといつて九段の富士本亭—今は無い—へ出演してゐた時分、一日京橋八官町の槌家といふ待合の女將から、突然に手紙が一通来て、情願遊びに来て呉れるやうに、待つてゐるからといふ、頗る非常に色つばい文句であるから、ハハアして見ると、彼家の女將は俺に少々思し召しあるのだな、御膳を据へられて食はざれば、男子末代までの耻辱、此奴は是非とも行かすんはあるべからずだと、止せば宜いのに自惚切つてゐる彼は、態々二三人の取巻を引つ張つて、例の槌家へ行つたところ、女將は素より女中までが、其れは／＼の款待振りに、へン色男は何んなもんだいと、彼は荐りに鼻を掻めかしてゐたが、頓て種々の酒肴が

出る、續いて藝妓が現はれるといふ騒ぎ。奴さん彌よ有卦に入つてゐると、其内に
時間^{じかん}が来て、藝妓^{げいぎ}が歸つて了つた後、座敷^{ざしき}が稍や濕りかゝつた時分、例^{れい}の女將^{おんなじやう}が現
はれて、今晚^{こんばん}は寔^{まこと}に有難^{ありがた}う存^{ぞん}じましたと、厭^{いと}やに改^{あらた}まつて出たと思^{おも}ふ刹那^{せつな}、彼の面
前^{まへ}へ差出^{さした}したのは、意外^{いがい}も意外^{いがい}、十六圓餘^{じゅうろくえんあまり}の勘定書^{かんていしょ}であつたから、流石^{さすが}の彼^{かれ}も。
是^{こゝろ}れはイヤハヤ……………。

藝界珍談奇聞終

明治四十三年十一月十四日印刷
同 十一月十八日發行

定價金五十五錢

演藝名家の面影
附珍談奇聞

不許複製製

發行所

東京市牛込區新小川町三丁目十一番地

宇宙堂

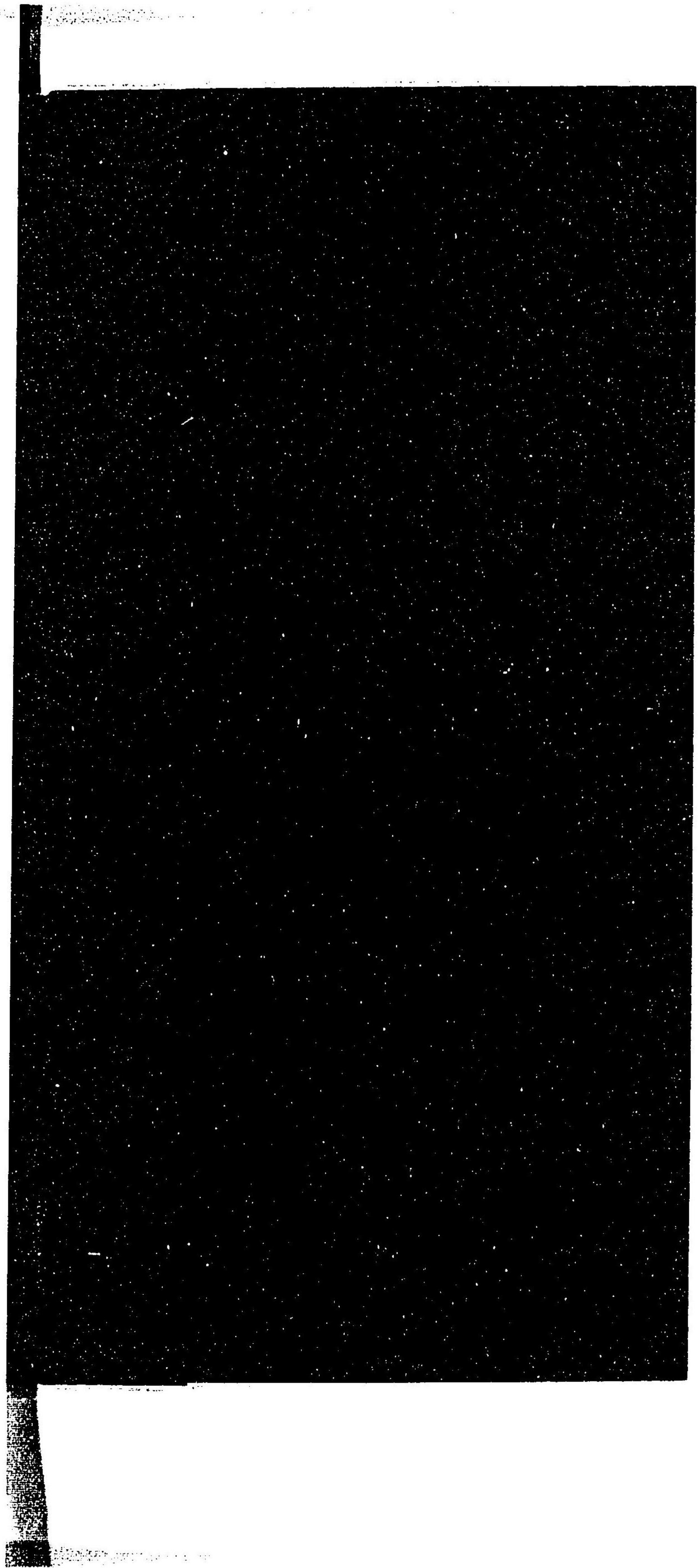
著者 川尻清潭

東京市牛込區新小川町三丁目十番地 發行者 藤田甚四郎

東京市赤坂區新町三丁目三十三番地 發行者 村橋圭二

東京市芝區新錢座町十番地 印刷者 中村彌助

東京市芝區新錢座町十番地 印刷所 近藤商店



特 11

500

074759-000-8

特11-500

演芸名家の面影

川尻 清潭 / 著

M43

CEK-0057

